

分けずに、ともに学ぶ

フェイスブックは情報発信とともに、ホットで貴重な情報を入手でき重宝している。12月5日の北海道新聞に「障害のある子もない子と一緒に インクルーシブ教育どう浸透」と題した特集記事が掲載された、という投稿があった。先進地・兵庫県芦屋市の普通学級での学習確保を紹介している。インクルーシブ教育は障害のない子も変えるという指摘、担当教員の「自分以外のところにアンテナが広がって優しい子が知らずと増えていきます」という言葉が心に残った。分けずに、ともに学ぶことの意義だ。

12月3日つどいの杉田宏さんの資料を思い出した。「障害者だから、〇〇〇」という諦めや思い込みと向き合おう — ①障害があると、「なぜ地域の学校に行ったんですか？」って聞かれる。それはとても暴力的だと思う。その理由を説明しなければならない前提には、障害者が健常者と隔てられていることが当たり前の社会があるのではないだろうか。ただ、普通に「みんなが行くから僕も行く」というだけなのに……。みんなも一緒に学んだ方が……。という理由を並べて、一緒に学ぶことに了解を得なければならないという現実がそこにはある。ともに学ぶことは厳しい。「当たり前やん！それが普通やん」ということ、ただそれだけなのだけれど、その当たり前の学校生活をつくるために、様々な孤立感や孤独感を感じなければならないことがたくさんある。それでも、私が障害のある人も、ともに地域で、ともに学校で学ぶことをあきらめないのは、ただふつうに生きたい、自分の人生を自分が引き受けて、自分の人生の主人公として生きていきたいと思うからです。



②何もしなければ、分けられる 様々な場面で、保健師や医師、理学療法士、作業療法士、保育士、教師などから、専門的なアドバイスを与えてもらうことは必要です。でも、その人のアドバイスは、周りの人との関係性などを見ていない場合が多く、「あなたのため」というもっもらしい理由で、友だちとの関係を途絶えさせ、「みんなと一緒にいる」ことを難しくさせてしまう現実があります。学校の先生や児童デイサービスの職員さんは、力強い味方です。でも、その人しか、私のことをわかってくれている人がいないという状況はあまりにも寂しすぎます。僕はやはり、友だちが僕のことをわかろうとしてくれることを望みます。

③ともに学ぶことが、ともに生きることにつながる ともに生きようとするからこそ、障害者の差別をなくすために努力する。まだまだ、ともに生きることに関心がないような気がします。ただふつうに、当たり前。そうだね、そりゃそうだという共感の輪が広がっていくように、私たちは常に思いを発信し続けていかなければならないのだと思っています。

(2016年12月8日)